

## 子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑧

水 沼 昭 子

皆でうどんを作る……園生活での楽しいひとときである。「今日も作る？」寒い日などなおのこと楽しみに待つ。折り紙やクレヨンで遊ぶ様に子供達の園生活に溶け込んでいるうどん作り。ボールの中に強力粉と薄力粉を入れ、塩を少しと水を入れて行く。入れたはずの水が粉の中に埋まって見えなくなる不思議さを、いつも同じように持ち続けながら、もう、その作業のころは周囲を取り囲む子供達にとって手を出したい瞬間だ。そしてボールのまわりから、ゆっくり手を入れて混ぜて行く。小さい塊りが手の動きの中で大きくな

り、やがて一つの塊りになる。その時、かならず子供達は耳たぶをさわる。次に粉の塊りをさわる。「もういい固さかな」と調べる為である。「耳たぶの固さがいいんだよ」そう教えてくれたのは年長のD介であった。幼稚園のうどん作りは、このD介によってはじめられたものだ。

神経質で友達の動きや言葉がいつも気になって、その事がトラブルを起し、友達との関わりを上手に持てないタイプのD介。気持を伝えたり、我慢をすることが苦手なD介。考える力も表現する力も、どの子より

も豊かなはずのこのD介の毎日の様子に心を痛めながら、どうにかして仲間の中で本当のD介の良さを示させたいと考え続けていた。そんな時だった。連休明けの登園に、「信州のおじいちゃんちで、うどん作って来たんだ」彼は、あいさつも忘れて報告した。その表情と言葉が私の心に広がっていった。その日、D介の隣りで昼食を食べながら、うどん作りの話を聞いた。

とてもうれしい経験だったに違いない。夢中で話すD介の明るい表情や声を受けとめながら、「こんなD介を仲間の中で見せてやりたいナ」との思いで話を聞いた。D介の小さい手から作り出されるうどん。そのうどんを茹でるD介のおばあちゃんの笑顔までが伝わってくるようだ。「幼稚園でもうどん作らない？ むずかしいかな？ できるかな？」私は思わずD介にそう語りかけていた。前後の計画も準備もないと云われるかもしれない。しかし、D介の表情、言葉、そして周囲の子供の表情を見た時「これだ！」と思ったのだ。

D介は想像もしていなかった私の申し出に驚きなが

ら承知をした。お母さんに材料と作り方を聞いてくる事を約束してその日は終わった。無論、降園時に迎えに来た母親には、その日の事を事前に報告をして家で受けとめてもらうようにした。翌朝、いつもより早く登園して来たD介の手には、母親が書いてくれたうどん作りの材料などの紙が、しっかりとぎられていた。材料が整えられた数日後、D介を中心にうどん作りがはじまった。粉と水を混ぜるD介の小さい手。ボールの中で手首を上手にまわしてこねてみせるD介に、まわりに集まった仲間達は驚いた表情を向けた。すぐやってみたい子が数人うどん作りに加わる。見ている時は簡単そうでもD介のようにはうまく行かない。「すごい。Dちゃん、うまいんだね」D介に向けられる言葉が輝いているようだ。「Dちゃんがはじめた。」「Dちゃんがとったのー」それまでD介への言葉は沈んで重かった。輝いた言葉の中でD介は耳たぶをさわって「この位の固さになったらいいんだよ」と教えたのだった。D介の手でこねられた粉の塊りを、私はクッキ

ング・シートの上でのして見せた。代用のケーキのローラーに粉をいっぱいつけながら、広く、大きくのさされて行く塊りに、また子供達の歓声があがる。D介の小さい手がその上に粉をふりかけ、私が塊りをたたんで細く切る。不思議な作業に吞まれたような子供達。「うわあ。やっぱり、ほんとのうどんだ」「やったあ」茹でられたうどんがざるの中に現われた時、安心したような、おどろきとうれしさの混ざった言葉が飛びかかった。その日のおべんとうは、先生の作っておいた、だし汁をかけたDちゃんの作ったうどんを少しずつ味わった。「ほんとに、ほんとのうどんだね」「Dちゃんすごいね」。こうして幼稚園のうどん作りは始まった。D介はこのうどん作りの中で彼の持つ本来の力を上手に出しはじめた。また、仲間の、D介を受けとめる思いも少しづつ変っていった。D介のうどん作りが皆のうどん作りになって行く中で、D介のイライラした姿は、ほとんど見られなくなった。

このうどん作りの関わりは安易な、無計画なものだとの批判を受けるかもしれない。単なる思いつきではなかったかとの意見もあるかもしれない。しかし、時にはこうした、その時、真正面から受けとめてやる事を通して、また、子供達の出来事と受けとめ、それを広げて子供達の生活の中に投げかえしてやる。

うどんを上手につくる：為にはなく、その事を通してD介の新しい面を、本来の姿を仲間の中に示して行く。その一つの手だてとして、今も、あの時の思いは大事にしたいと思うのである。

(千葉・愛隣幼稚園)

